

# アンフェア the movie

2007(平成19)年2月21日鑑賞(東宝試写室)



監督＝小林義則／原作＝秦建日子『推理小説』（河出書房新社刊）／出演＝篠原涼子／椎名桔平／成宮寛貴／阿部サダヲ／濱田マリ／加藤ローサ／加藤雅也／大杉漣／寺島進／江口洋介（東宝配給／2007年日本映画／112分）

## 第3章

### ヒロインの個性・職業も千差万別

……雪平刑事になりきった篠原涼子のカッコ良さは認められるものの、緊張感のないダラダラとした進行は所詮、テレビドラマの延長……？ 登場人物たちのキャラは、うまく設定されているが、肝心の「警察庁の機密費の不正流用」という大問題のポイントがさっぱり見えてこないのが、大きな不満……？ 人気テレビドラマを映画化すれば、テレビの宣伝力で観客を劇場に呼び込めると安易に考えていると、きつとっぺ返しが……。

## 所詮テレビドラマの延長……？

私は1度も観たことはないが、2006年1月からスタートした篠原涼子主演のテレビドラマ『アンフェア』が人気となったのは、何といても篠原涼子扮する雪平夏見のカッコいい黒服と拳銃さばき……？

この映画に掲げられている「アンフェアにはアンフェアを」という考え方には多少疑問があるが、この映画もきっとそうだろうと思って、『アンフェア the movie』の試写を観に行ったのだが……。

ストーリーはそれなりにつくられているものの、私語を交わし、靴音をたてながらの病院潜入や、潜入した病院内でのガラス越しの母子の長話（?）、そして左腕を負傷したくらいで「このままでは死んでしまう」と大げさに言いながら、病院内でゆっくり治療したり、緊張感のないことおびたしい……。さらに、互いに拳銃を突きつけ合いながらの長々とした会話シーンも再三登場。こりゃ、所詮テレビドラマの延長……？

## テーマは今風だが……？

この映画のテーマは、警察内部の不正＝裏金問題というきわめて今風なもの……？ 警察官だった雪平の父親が殺害されたのも、この映画で「豊洲警察病院立てこもり事件」のリーダーとして登場する後藤国明（椎名桔平）が追っていたのも、警察内部の不正問題だった。そして実は、今は雪平の上司となっている警察庁公安部総務課管理官の斉木陣（江口洋介）もそうだった。

雪平が捜査一課にいた時の上司山路哲夫（寺島進）の跡を継いだ小久保祐二（阿部サダヲ）は、雪平のやり方に不満タラタラだったが、今の上司斉木は「終わりよければすべて良し」という主義で、雪平がややもすれば単独行動に走ることに寛容……？

今、雪平は家の中で警視庁刑事部鑑識課検視官の三上薫（加藤雅也）と電話中だが、その内容もその不正追及に関係する話のよう……。そんな雪平は、一人娘の美央（向井地美音）を小学校に送ってもらうについて、ハウスキーパーに車のキーを渡すだけで、娘に声をかけてやることもできないほど電話に夢中。そんな時大爆発音が響いたため、驚いて外に出てみると、炎上する車とそこから吹き飛ばされ倒れている美央の姿が……。

これは、雪平に恨みを持つ誰かの犯行、それとも不正追及に待ったをかけるための誰かからの口封じ……？

## テロリストたちの要求は……？

雪平の一人娘美央が入院したのが豊洲警察病院。ここは最新のハイテク機能満載の病院だが、研究室にはある大変な細菌が保管されていた。当初この病院で銃を発射して職員や患者たちを脅し、病院を占拠したのは、顔にかぶりものをした戸田（成宮寛貴）たちのちょっといかれたような若者グループだった。しかし実は、その首謀者は元 SAT 隊（テロ対策特殊部隊）のリーダーでありながら、警察の不正追及を逆に叩かれて、懲役8年の実刑を受け服役を終えた後藤……。

後藤の要求は、来院中の警察庁長官の命と引き換えに、「警察庁が機密費を不正流用してプールした裏金80億円を2時間以内に用意せよ！」というものだった。

これに対応するのは、病院の近くに設置された指揮本部の管理官山路だが、事実上はテレビ会議を通じて警察庁次長の入江（大杉漣）が指揮しているようなもの……？ 病院内の人質は、警察庁長官を除いてすべて解放されたが、実は美央だけはまだ病院内に……。

それを聞いた入江次長だったが、警察庁長官救出のためには SAT 隊の突入もやむなしとして、第1隊に突入を命じたが……？

### 不正流用のポイントは……？

みんなが注視しているテレビ会議の中で、後藤から「警察庁の機密費の不正流用でプールした裏金80億円」と指摘されて慌てたのが入江。彼は「次期警察庁長官の座を狙っている野心家で、警察の体面を重んじる冷血漢」らしいが、この映画では、結局80億円の支払拒否によって、警察庁長官の命は簡単に奪われた後、東京都民全体に対する細菌テロの予告の前に、あっさり80億円を犯人たちの口座に振り込むことに……。

最初に突入した SAT 隊が実は後藤とつるんでいたというのは、何ともお笑い種。しかし、第2隊として突入した SAT 隊が第1隊の SAT 隊から待ち伏せられて全員射殺されたのは、警察内部に通報者がいるためという設定は面白いもの。ところがこの映画では、内部の通報者は誰なのか？ その動機は？ その役割とは？ などの説明があいまいであるうえ、機密費の不正流用問題のポイントについて何も突っ込まない。

また、なぜそんなことが可能であり、その責任者がどう処罰されたのかについても、全く触れず終い……？

テレビドラマならそんなややこしい問題に深く突っ込まなくてもいいだろうが、劇場版ではストーリーを面白く繋いでいただけではダメ。登場人物たちのキャラはテレビドラマ版から劇場版を通して、かなり明確で面白いのだが、ストーリーを組み立てる肝心の部分の突っ込み不足は、この映画の致命的な欠陥……。

### 蓮見杏奈の行動も、斉木の行動も……？

2006年10月3日放送の「PLAYBACK - THE SPECIAL」で登場し、豊洲警察病

院に入院していた元警視庁捜査一課情報解析係の蓮見杏奈（濱田マリ）が、この映画にも登場する。彼女はもともと雪平の同僚だが、この映画では後藤の仲間として80億円強奪の要求を実務的にパソコンを使って処理している。

しかし、なぜ彼女が後藤とつるむことになったのかは、映画の中ではよくわからないうえ、彼女がなぜ最後に後藤を裏切るのかもよくわからない。さらに、斉木がいきなり蓮見を撃ち殺してしまったり、後藤とも仲良く対面した斉木が、いきなり後藤と対決したりするため、頭の中は大混乱……？ スクリーン上のカッコ良さばかり気にせず、なぜ彼は、彼女はそのような動きをするのかについて、きちんと説得力ある情報を提供してくれなければ……。

### 篠原涼子はカッコだけ……？

この映画でも私の大好きな篠原涼子は、トレードマークの長い髪をなびかせながら、白いブラウスに黒服で拳銃を持ったカッコいい姿で登場する。しかし現実には、ストーリー全体を通じて私が期待した華麗な拳銃さばきもカッコいいアクションも見せてくれず、ただ潜入した病院の中を駆けめぐっているだけ……？ また、本来1人で潜入するべきところ、最初は事実上三上の助けを借りながらの潜入だし、あえなくテロリストたちに捕まった後は、潜入してきた上司の斉木に助けられてばかり……。これでは、篠原涼子のカッコ良さはホントにカッコだけ……？

2007(平成19)年2月21日記